「日々の理科」（第 1769 号）　2019,-5,13

「ドングリの花（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

ドングリはブナ科の樹木の果実（堅果）の総称で、日本の子どもにとっては、非常になじみの深い「自然物」の一つだろう。

東京で見られる代表的な「ドングリ」／C. Tanaka 画
左上から、シラカシ・マテバシイ・スダジイ・クヌギ

私の通っていた小学校は、校庭が武蔵野台地の雑木林に囲まれていて、毎年秋になると、大量のドングリ（コナラの実）を落とした。私は友人と一緒に夢中で拾い集めて、教室のロッカーに「保管」したものである。何かに使う予定があったわけではなく、ただ「大量に集める」ことだけが目的だった。やがて殻に穴が開いて、白いイモムシが大量に発生する。「コナラシギゾウムシ」の幼虫だ。それでも懲りずに、毎日のように集め続けるので、しまいに女の子から苦情が来て、担任に叱られる---というお粗末な結末となった。

「クリシギゾウムシ」の幼虫
ブナ科の果実（堅果）の中で育つイモムシ。生まれてからこれまでに、クリの実しか食べてないので、鼻を近づけると「栗の匂い」がする。信州ではこの幼虫を炒って食用にする。栗の味がして美味という。

ドングリは言うまでもなく、ブナ科の樹木の種子なので、春になると発芽する。たとえば「コナラ」について観ると、大量にドングリがまき散らされる割には発芽率が良く、公園の植え込みの土でも、ドングリが発芽しているのを見かけることがある。

「コナラの発芽」／C. Tanaka 画

さて、果実をつけるからには、どこかで花が咲いているはずである。受粉が必要だからだ。「ドングリの実」を知らない日本人はまずいないだろうが、「ドングリの花」は知らない（正確には気が付かない）人が多いにちがいない。

ドングリをならせるブナ科の植物群には、常緑樹と落葉樹が混在している。小石川植物園には、日本産のブナ科の樹木がほとんどすべて植えられている。私はいくつか観察してみることにした。